

行基の研究

岸 裏 広 章

行基の生涯は七世紀後半から八世紀前半にわたっており、大宝律令が施行された頃から民間伝道と社会事業に活動し、天平二十一年八十二才で没するまで四十九院が建立せられ一般民衆の救済につとめ、その行実は日本仏教思想史上において偉大なる功績をのこしている。

行基の活躍した時は律令国家の発展をみせる時期であり、律令仏教が形成、確立の時期であつて彼は度々政府から弾圧され、その活動は決して容易なものではなかつた。

行基は天智天皇が近江の大津の宮で即位した年（六六八年）に王爾の子孫である高史才智を父として、峰田首虎身の娘、古爾比売を母として河内の大鳥郡家原村に生れ、出家したのは十五才の時である。当時では一般民衆は容易に僧尼となる事は許されなく、出家したものもそ

の行動の自由は認められず僧尼になる者を出す家は上層農民や豪族、あるいは学問や仏教に関係の深い氏族である。

行基は中級豪族高史氏に生れ、高史氏は学問や仏教の文化をそなえた書氏と深い関係にあり、かゝる氏族の環境に育つた行基が出家の道をえらんだ事情であろうと思われる。

行基が出家してどのように仏教を学んだであろうか、「続日本紀」には、初出家、読瑜伽唯識論、即其意、と記しており諸伝にも行基が瑜伽唯識を学ぶと述べている事からそれは認められるであろうが、行基の唯識教学の師承については諸伝には異説があつて、定昭、道昭、義智、智圓、徳光、輝師、新羅惠等であるがその中、行基の師として道昭が最も有力と考えられる。

道昭は白雉四年に入唐し、玄奘に従つて唯識法相を受け齊明天皇七年に帰朝し、元興寺に住して禅院を建て請来の経論を納めて、自ら修行し社会事業につとめた。

「続日本紀」（道昭伝）に「天下の行業の徒、和尚に従

つて禪を学ぶ」、「天下に周遊して路傍に井を穿ち、諸の津の渚の処に船を儲け、橋を造る。乃ち山背の国の宇治橋は和尚の創造する所のものなり」と記されており、行基はおそらく道昭から受学し思想的に強い影響を受け、行基の仏教的実践に於ける立場が形成されたと考えられる。

従来、行基の唯識教学はあまり問題にせられなかつたが行基の基本的な立場と歴史との關係を把握する為には必要かくべからざるものである。「行基菩薩伝」や「行基大菩薩行状記」には行基二十四才の時、徳光禪師より具足戒を得受すと記されており、それは認められる事であり、天平期を中心に展開された受戒作法が瑜伽論と四分律に基づいて得戒せるものであり、おそらく行基も当時の方式に於いて得戒したものと考えられる。

瑜伽戒は小乗具足戒を律儀戒として包摂するという特性を有するものであり、行基の実践的基礎をなすものであつて、律令国家が僧尼令に於いて示すような小乗戒律を取り入れつつ小乗戒の立場を無視し、大乘戒の条項

を取り入れつつ大乘戒の立場を無視するものとは、その立場を異にするものである。

行基の仏教的実践の立場の形成は十五才頃から道昭の没年（文武天皇四年）行基三十四才頃までに終つていたと思われ、彼の思想的な基盤が瑜伽戒の上に求められていた事は明かであり、続いて行基はどの様な立場と実践を見せるのであろうか。

行基の仏教的実践の具体化を示すものとして「行基年譜」によれば、卅七才家原寺、卅八才高蔵院、卅九才峰田寺等の建立がなされており、行基の独自の動きが示されている。然るに行基はこの頃から私道場を創立して民間伝道にふみきり、亦布施屋を創設して平城京造営等に伴う役民、運却夫の収容に當つたと考えられる。

こゝに於いて民衆の中に立つとうとする行基の姿を見る事が出来るし、反面、僧尼令に基づく政府との対立並びに弾圧を見る事が出来る。養老元年行基五十才の時に出了た詔（続日本紀）には、

凡僧尼、寂居寺家、受教伝道、准令云、其有乞食者、

三纏連署、午前棒鉢告乞、不得因此更乞余物、方今小僧行基并弟子等、零疊街衢、妄說罪福、合構朋黨、焚剗指臂、歷門仮説、強乞余物、詐稱聖道妖惑百姓、道俗擾亂、四民棄業、進違釈教、退犯法令、と述べ、行基の活動を僧尼令違反と結び弾圧しているが、行基は民間でかなり影響をもつ存在であつた事から農民と行基とを隔離して、農民の貢納力をねらつた律令政府の政策の一貫であつたと推定される。

行基に対する政府の弾圧は養老元年以後、天平三年頃まで続けられたと思われるが、政府の規定せる僧尼令はいたずらに教団に対する上からの權威による政治的な圧力を示すものであり、僧尼を内より教導せしめるものでなかつたと考えられる。

行基の行動は非合法的であつたかも知れないが仏教者としては本来の立場に立つて人間関係の革新にはたらいて来たもので、行基の行動は一貫したものを示し、政府と行基の対立は仏教受容の本質的な見解の異いに基ずくものであつたと考えられる。

行基の行動の目標は政府への抵抗にあつたのではなく、仏教の立場に立つ民衆の救済にあつたのであり、合法性も非合法性も行基自身の立場の変化をしめさないのは勿論であらう。

行基の生涯に於いて最も大きな歴史的事件は世界最大の大仏が造られた事で、その造営に彼も起用されたのは政情の変化と考えられるが大仏建立を発願せられた聖武天皇の回心で有り、政府をして行基に対する態度を改革せしめた直接の原因であらうと思われる。

しかし行基の念願とせる所は民衆の福祉にあるのであつて彼の生涯に於ける行動の目標は民衆の教化と救済にあつた事は言うまでもない。続日本紀に「時の人、行基大菩薩と言う」とあり、民衆と共に生き、人間関係の革新に仿いた行基の偉大なる姿を見る事ができる。